

論文

明治京都でイギリス人旅行者たちが求めたコト・モノ —『京都日出新聞』の「外人と京都」をてがかりに—¹

What British Tourists Hoped to Experience in Meiji Kyoto: Focusing on Some Issues Discussed in 'Gaijin To Kyoto,' Articles Serialised in the *Kyoto Hinode Newspaper*

長谷川 雅世 (高知大学教育学部)

Masayo HASEGAWA (Faculty of Education, Kochi University)

ABSTRACT

After the first Kyoto Exhibition in 1872 (Meiji 5), the number of foreigners visiting Kyoto steadily increased, especially those from European countries such as the UK. In response, a serialised article titled 'Gaijin To Kyoto' ('Foreigners and Kyoto') was published in the *Kyoto Hinode Newspaper* in 1902 (Meiji 35), which asked locals to improve services and facilities for foreign tourists in their city. This essay will focus on some of the issues the article described as requiring reform, particularly the attitudes of Kyoto citizens toward Europeans, and examine how British tourists depicted the issues in their travel writing. In doing so, this essay aims to reveal not only how Japanese people viewed the way foreign people travelled, but also what British travellers hoped to experience in Kyoto and how they saw the city in the Meiji period.

According to 'Gaijin To Kyoto', crowds of Kyoto citizens would follow foreign people around and stare at them. Nonetheless, British people described them in favourable or admirable terms in their travel writing, rather than as offensive or ridiculous. Their sympathetic accounts are very possibly a type of idealisation rather than a truthful representation of Kyoto people. British travellers believed that Kyoto was the epitome of exotic Old Japan untainted by Europe. Consequently, they saw its inhabitants as primitive and noble. British travellers, moreover, wanted the city to be representative of genuine Old Japan, so censured most of the European influences they detected there. However, they never criticised the most obvious signs of the invasion of Western culture into Kyoto, their accommodation and meals provided in a European style, but indeed were very willing to enjoy them. This may have been largely because it was necessary for them to sleep and eat in their own style when they wanted to travel comfortably. Another possible and conceptual reason for this is related to the fact that they expected to experience the exotic atmosphere of Old Japan in Kyoto. In order to feel the exoticism of a society or a culture, we do not need to attempt to integrate ourselves in it and view it from the inside by adopting its lifestyle, but rather all we have to do is to remain foreigners with different manners and customs and maintain the viewpoint of outsiders. This is why British tourists never denied themselves the luxuries of European-style hotels and dishes, and why they did not patronise local establishments and restaurants in Kyoto. If so, the attitudes of British travellers in Kyoto, just like their idealised representation of its inhabitants, imply that they hoped to experience Old Japan by visiting Meiji Kyoto. In essence, they wanted to feel a sense of exoticism at visiting a society thoroughly different from theirs.

はじめに

欧州の諸国内に於いては十九世紀の末葉頃から国際旅行が次第に顕著な現象となってきた。トマス・クック、アメリカン・エクスプレスの如き国際的旅行斡旋業者が生れ、ベデカーの如き世界各国の旅行案内書が発行されるようになり、かくして次第に国際旅行は欧米を風靡する流行的現象となってきた。(丸山 89)

国際観光局長だった田誠氏は、1940(昭和 15)年発刊の『国際観光論』のなかで、19世紀末葉におこった世界漫遊旅行の流行りについて上記のように述べている。この世界旅行ブームの影響は開国後まもない日本にもおよび、訪日旅行者の数が増えていった。彼らの筆頭に挙げられるのがイギリス人である。この現象の根底には、イギリスでのジャポニズムの流行があり、これについてチェックランド(Olive Checkland)は「東洋の異国情緒と、それにもましてこれまで世界から隔離され隠され続けていたという魅惑を結合させた国ほど、ヴィクトリア朝代人の関心をひき起こしたものはなかったといえるだろう。ひとたび『開国する』と、日本は社会のあらゆる階層で強い好奇の的となった」(258)と説明している。

これらの流行を背景に、明治時代に多くのイギリス人が日本を旅し、古都京都は彼らにとって必見の場所となった。しかし開国後しばらくはそうではなく、当時の事情を1918(大正7)年の*The Japan Chronicle, Jubilee Number*は、外国人は「京都には二十五マイル以内に近づくことが許されず」、そのため「1872年までに京都に入ることができた外国人は全部で10人前後もいたのだろうか」(堀・小出石 183)と伝えている。だが1872(明治5)年に状況は変わり、「この年政府は、この国最初の博覧会を京都で開催し、一般の外国人にも見物を許可した。この時から外国人の京都訪問の許可証が手に入れやすくなった」(ibid. 184)。東京遷都以降の京都の衰退を背景に、1872(明治5)年に京都の復興・発展を目的とした京都博覧会が開催され、以降それは毎年行われた。これを契機に、外国人にとって「隔離され隠され続けて」きた場所であり、同時に、このうえなく「異国情緒」溢れる場所だった京都に、イギリス人をはじめとする外国人旅行者たちが次々と訪れた。そうして明治時代を通して来京外国人の数は増え、彼らは京都での旅の様子を書き残した。

このような状況下の1902(明治35)年に、『京都新聞』の前身である『京都日出新聞』に「外人と京都」という連載記事が出た。その筆者はS・Y生となっており、10月7日から11月28日にかけて計38回にわたって連載された。初回の「総説」は、この連載記事の目的を次の

ように述べている。

誰も云ふ事であるが京都は佛國の巴里、日本第一の遊園地とは殆ど世界の公評である。加ふるに美術工藝の淵藪であるから、観光と土産の買物を兼ねて神戸よりするものも、横濱よりするもの、必ず立寄るのが平常である。であるから、京都観光の外人は、悉く我邦観光の賓客で、云はゞ我國に於ける渴仰心の大半は、此の京都で醫するのだ。されば我京都人の外人に對する責任は頗る甚大であるが、さて其設備、待遇の方法はと云ふと、随分顧みて忸怩たるものが多い。明年は大阪で大博覧會の開設もあり、来遊外人の数も年々増加する一方であるから、此際改善すべきものは改善すべき時機であると、吾人は斯く考えるのである。(3)

ここには、筆者の京都に対する誇りとともに、国際観光都市としての京都の「おもてなし」に対する不満が表れている。国外での京都の名声、ひいてはそれが代表する日本の名声を高めるためにも、京都での外国人旅行者たちへの対応を改善すべきだと訴えている。そして個々の記事で、「京都の外人に對する設備、待遇の方法」(3)、具体的には、ホテルや商店やガイドや車夫の現状を語り、その改善点を挙げている²。

本論文はこの「外人と京都」でとり上げられている事柄、特に京都の一般庶民の外国人旅行者たちへの対応を中心に、それらがイギリス人旅行者たちの旅行記でどのように描かれているのかを考察する。それを通して、日本人の目に映っていた外国人の京都での旅のあり様と同時に、イギリス人旅行者たちが京都の旅で求めていたコト・モノ、そして彼らの明治京都へのまなごしを明らかにしたい。

1. 京都の市井の人々

「外人と京都」が最初に改善を訴えているのは、外国人旅行者たちを相手に商売をしている人々ではなく、市井の人々の態度である。連載初回の「総説」の後半は、新聞読者である京都庶民に向けての忠告となっている。

茲に特に京都市民に告げたいのは、攘夷心を一掃して貰ひたい事だ、成程愛國愛郷の精神は結構に相違ないが、外人とて決して輕蔑侮辱すべきものではない。然るに兎角我市民は外人に冷淡であつて、凡ての事が其場限りである。貿易業者には固より大に警告する積であるが、一般市民もなるべく外人に接するに、永遠の考慮を持つて貰ひたひものである。(・中略・) 要するに我市民の外人に對する態度は、對

手も紳士であれば、おのれも紳士と云ふ心を持つて貰ひたい。さすれば、外人が買物をする跡からゾロゾロ附いて行く醜態もないであらう、尾籠なる振舞して嗤笑を招くといふ弊もなくなるであろう。(3)

この文章からは、外国人旅行者たちに対して排他的で愛想がなく、それでいて、好奇の目を向けて後をつけ回し、彼らに嘲笑される京都の人々の姿が想像される。

事実、京都でイギリス人旅行者たちは、街の至る所でじろじろ見られたり、ぞろぞろとついて来られたりしていた。例えば、124 日間で世界一周をした際に京都に立ち寄った海運業者 Ralph Leyland (1880) は、駅舎を出た途端、地元の人々に「すごい好奇心を持ってじろじろ見られ」(149)、街中でも人々は「外国人にとっても強い興味を抱いているようだった」(156)と語っている。政治家である夫と子どもたち、そして船長から料理人まで 30 人以上のスタッフと一緒に蒸気機関つき快走帆船サンビーム号に乗って 1877 (明治 10) 年に日本にきた Annie Brassey (1878) の場合は、いく先々で、「集団が私たちの後をつけ、走って私たちの先をいって玄関まででて私たちを見るように他の人に声を掛ける人もいた」(346)と言っている。1891 (明治 24) 年に日本を訪れた Ethel Vincent (1892) も同様の経験をした。ちょっとした群衆が彼女たちの買物に勝手に同行し、「その人だかりのせいで、薄暗い商店のなかがより暗くなった」らしい (189-190)。画家 Alfred East とリバティ百貨店の創業者 Arthur Liberty とその妻 Emma らとともに 1889 (明治 22) 年に日本を観光した美術雑誌 *The Studio* の創刊者 Charles Holme も、「驚きで口を開けて私たちをじっと見る様子から、彼らにとって私たちはその場所の見世物のひとつになっているのだと思った」(3)と記している。さらに彼は、外国人旅行者たちがそれほど珍しくもないはずの京都で、人々がそのような反応を示すことを不思議がり、次のように言っている。

We are a little astonished to find in a place like Kyoto, so frequented by Europeans and Americans, that the people are not yet so accustomed to the sight of foreigners but the appearance of one is at once a signal for him to stop, open his eyes to their fullest extent – and his mouth on occasions – and STARE (I put the word in capitals, because it really requires them to give the word its due intensity of meaning). (3)

このように京都の人々は、「外人と京都」が指摘している「醜態」を演じていた。しかし、彼らに対するイギリ

ス人旅行者たちの反応は、「嗤笑」ではなかった。「尾籠なる振舞」にもかかわらず、イギリス人旅行者たちは彼らを好意的に描いている。Leyland は、駅で彼をじろじろ見た人々は「みんな笑顔で幸福を絵にしたかのよう」で、「彼らの聡明で知的な顔つきは、礼儀正しさとともに、(…中略…)人を大いに満足させる彼らの街への歓待を表しているようだった」(149)と述べている。街中で出会う京都の人々も、彼には「いつも笑顔で幸せそう」(156)に見えた。Brassey と Vincent と Holme も、彼らを追尾したり凝視したりした人々を、「完璧に秩序だった (perfectly civil)」(Brassey 346) や「礼儀正しい (polite)」(Vincent 189) や「気のよい (good)」(Holme 3) と形容している。

上記の旅行記だけでなく、ほかの旅行記でも、京都の人々は概して肯定的に描かれ、しばしば賛美される。例えば、工部大学校で教師を務めた William Dixon (1882) と私有の快走帆船ワンダラー号に乗って来日した Charles & Susan Lambert (1883) は、京都の人々をそれぞれ、「快活 (sunny)」(595) と「陽気でご機嫌な (cheery good humour)」(259) と評している。王立砲兵隊将校だった Henry Knollys (1887) の場合は、夕暮れどきに「楽しげに」道を急ぐ京都の人々を描写している (284)。そこには、「みんなが思いっきりおしゃべりをし、笑ったり冗談を言ったりしている」光景があった (284)。そして、「けんか腰の者や喧しい者、罵ったり、酔っぱらったり、みっともなくねだる者の姿は全くなく」、だから警官など必要ないように思われた (284)。1882 (明治 15) 年に世界一周の途上で京都に立ち寄った Hugh Wilkinson (1883) の場合は、芝居小屋での庶民の様子を語りながら、そこで気づいたような「親切な態度、礼儀正しさ、穏やかさ、心地のよいしとやかな物腰を、私たちは街の至る所で目にする」(179)と述べている。そして、京都の人々は「乱暴な振舞や下品な言動」とは無縁であると言い、さらに「それらは我々の下々の者の間では見られるのだが」と述べて、彼らを同胞のイギリス人と比較し、後者を批判している (179)。

2. 「昔ながらの日本」を体現する京都

京都人に対する好印象や称賛は、単純に彼らが実際それらに値していたからというよりも、イギリス人旅行者たちが京都に期待していたものに起因している可能性が大きい。彼らが期待していたものとは、「昔ながらの日本」の姿であった。それを求めて京都を訪ねるイギリス人は多く、Henry Knollys (1887) はそのひとりだった。彼は「イギリス的な日本 (English Japan)」と「新しい日本 (New Japan)」をそれぞれ横浜と東京で経験したのちに「昔ながらの日本 (Old Japan)」を知りたいと思い、

「この目的を果たす最も容易で完全な方法」は京都へいくことだと考えた (274)。京都の街は彼の期待に応えたようで、彼はそこに「時代遅れや古臭さを感じさせることなく、明らかに本質的に昔ながらの日本」(277)を見た。Knollys から遅れること約 20 年、明治末期に京都を訪れた Hubert Jerningham (1907) も同じで、「純粋に日本的な街」(102)である京都は「本物で、古風で、昔ながらで、喜びを感じさせてくれる日本を体現している」(103)と感じた。

京都を「昔ながらの日本」だと感じた最大の理由は、Knollys の言葉を借りれば、「そこにはいかなる外国的な要素も混じっていない」(277)と思われたからだ。Annie Brassey (1878)も京都を「どこまでも日本的な街」(339)と称し、「そこにはひとりもヨーロッパ人が住んでいないようで、それゆえに、日本人の風俗や風習が完璧な形で見られるでしょう」(339)と記している。「アングロ・インディアンの世界漫遊家 (an Anglo-Indian Globe-Trotter)」の名で旅行記をだした C. R. Sail (1892) の場合は、寺や店の看板には英語が見られるものの「京都はほとんど完璧に日本的」(123)であり、「この街は全体的に欧化されておらず、清潔で、古風で、だから心地よい」(123)と述べている。

Sail は「昔ながら」であることを京都の美点とする一方で、京都、さらには日本の西洋化を悪影響だと見なししているが、同様のイギリス人は多かった。例えば、日本協会と日本赤十字社の会員だった Kate Lawson (1910) は、京都は「外国の影響に害されていません」(100)と記し、京都滞在について「間違いなく日本で最も魅惑的な場所で、私は昔ながらの日本の魅力的な雰囲気を本当に楽しみました」(100)と述べている。Ethel Vincent (1892) の場合は、京都が東京よりも「ずっと魅力的」なのは、東京ほど「あの忌まわしいヨーロッパ色で穢されていない」からだと言っている (189)。かつてシドニー大学で歴史を教えていた著述家 Douglas Sladen (1904) も東京と京都を比較し、「東京にはたくさんの大きな外国風の建物があり、それはヨーロッパの帽子を被ることで自分の衣裳の優雅さを台無しにしている日本人を想起させる」(380)のに対して、京都では「外国人や外国の習わしをほとんど見ることがなく」(380)、そこは「典型的な日本の都市」(380)であり「ヨーロッパに台無しにされていない都市」(385)だと述べている。

3. 非ヨーロッパ的な京都人

イギリス人旅行者たちは、京都を「昔ながらの日本」を体現する場所だと感じ、それゆえにそこに住む人々を非ヨーロッパ的で純粋な日本人だと見なした。例えば、Ethel Vincent (1892) は、東京と比べて京都では「生

活はより古風で (primitive)、人々はより素朴である (unsophisticated)」(189)と褒めている。1896 (明治 29) 年に夫と日本を旅した Catherine Bond (1898) は京都に着いたその日の夜に街に出かけるのだが、街の様子を「人のよい幸福そうな人々で街は溢れかえっており、彼らはみんな自らを楽しませ、他人を喜ばせることに夢中になっていました」と語り、そのうえで、「これが日本人の性質のすばらしい特徴なのです」と述べている (135)。Hubert Jerningham (1907) の場合は、「(京都が本物で、古風で、昔ながらで、喜びを感じさせてくれる日本を体現している) このことが意味するのは、人間の輝かしい美徳、各様の無邪気さ、純真さ、謙虚さ、そして人を喜ばせたいという気持ち (artlessness, simplicity, humility, and the desire to please) を持つ最大級の集団を、京都だけで有しているということなのだ」(102-103)と言っている。さらに彼は、「もしもヨーロッパ文明と呼ばれるものがこの幸せな人々を駄目にしてしまうのであれば、私個人としては、彼らが決してその影響を受けずに穢されないことを望む」(103)と言う。これらの記述からは、京都は、純粋に昔ながらの日本のままであり、それゆえに、その住人は称賛に値する人間性を保持しているのだという見方が読み取れる。イギリス人旅行者たちは、京都を彼らが期待していた通りの場所、つまり西洋の影響を逃れてきた異国としての日本を体現する場所であると見なし、これがその住人への好意的なまなざし、そして彼らの理想化へと繋がったのだ。

さらにこの理想化には、いわゆる「高貴なる野蛮人 (noble savage)」の概念に通ずるものが感じられる。イギリスをはじめとするヨーロッパの国々では、アフリカ人などのヨーロッパ人にとっての未開人が高貴だと捉えられることがあった。ヨーロッパ人たちは、彼らを文明・文化、特にヨーロッパ文明・文化によって穢されていない自然な状態のままの人間と見なし、それゆえに生来の美しい人間性を保っていると考えたのだ。この「高貴なる野蛮人」という考えと、上記のイギリス人の記述に表れている非ヨーロッパ的であるがゆえに京都人は昔ながらに高貴であり続けているという考えは、非常に似ている。

しかし、キリスト教信仰に対する未開人という見方がされたとき、しばしば「高貴なる野蛮人」への評価は真逆のものになった。この点においても、イギリス人による旅行記で描かれている京都人は「高貴なる野蛮人」と同様である。Amy Wilson-Carmichael (1895) の旅行記では、京都人は恐ろしい野蛮人と化している。Wilson-Carmichael は国教会伝道協会のイギリス人宣教師で、彼女が京都を訪れた 1893 (明治 26) 年 9 月には、

平安遷都 1100 年と平安神宮の地鎮祭を祝しての祭りが行われていた。その祭りを彼女は、「非西洋的 (un-Western) すぎて言葉で表現できない」(54) と批判している。さらにその祭りを楽しむ京都人は、「不気味な化け物のように踊り」(54)、様々な生物をまねて「叫び、吠え、歌い、不快な音を出し」(55) ていたと語っている。彼女の目には、彼らは「音と色と空虚な浮かれの混沌、暗愚の罪」(55) に陥っているようにしか見えなかった。京都はイギリス人の旅行記でたびたび、「神社仏閣の都市」や「日本の宗教の中心地」と呼ばれ、宗教的にも非ヨーロッパ的な昔ながらの日本を体現していると思われていた。そんな京都は、敬虔なキリスト教徒である Wilson-Carmichael にとっては、「邪悪さのなかにある世界」であり『『偶像崇拜にすべてを捧げた』街』(55) で、そこの住人は、高貴どころか異教の邪悪な野蛮人でしかなかったのだ。

香港で宣教活動をしていた Arthur Hutchinson による日本旅行記にも、京都の人々についての否定的な表現が見られる。彼は国教会伝道協会の *The Church Missionary Gleaner* で 1880 (明治 13) 年に 'A Visit to Japan' という旅行記を連載した。そのなかで 3 回にわたって、彼が「聖なる街」('A Visit to Japan III,' 27) と呼ぶ京都での旅を記しているが、最初のほうでは、京都人は好意的に描写されている。Hutchinson は八坂神社での夜祭りの様子を描き、そこにいた人々を「気立てのよい (good-natured)」(ibid. 28) と形容している。さらに、その祭りでは「我々丸腰のイギリス人 2 人は危険を感じることなく、夜に東洋の街の住人たちの間で安心していられた」(ibid. 28) と語っている。ただし、そもそも日本の祭りとは「それを行う口実は宗教に関連しているが、実際には宗教とは関係がないように思われる」(ibid. 28) と締めくくり、京都人の善良さと異教信仰との関連を否定しようとしている。そして、彼は日に日に京都が宗教的にもキリスト教というヨーロッパ文明の影響を受けていない異国で、「すっかり偶像崇拜に捧げられた街 (a city wholly given to idolatry)」('A Visit to Kyoto IV,' 37) であり「闇に包まれた未開の街 ([a] benighted city)」('A Visit to Kyoto V,' 54) だと痛感するようになる。同時に異教を信仰するその街の住人を「哀れな迷信の犠牲者たち」('A Visit to Kyoto IV,' 37) と呼び、彼らの異教崇拜の姿に「吐き気と悲しみ」('A Visit to Japan V,' 53) を覚えるようになった。

4. 京都のホテル

すでに述べたように、多くのイギリス人が、「昔ながらの日本」を求めて京都にやってきた。だから、そこで西洋的なものを目にしたときは興奮めした。例えば、1900

(明治 33) 年前後に京都に逗留したイギリス人女性 Augusta Davidson (1904) は、1895 (明治 28) 年に開業した街中を走る路面電車を「西洋を暗示する」(158) もので「古き宮廷の優雅な落ち着き」(157) にはそぐわないと評している。ただし、この「過ちである路面電車」を除けば、「ひとたび駅周辺から離れると、すべてが魅力的で、古き時代の雰囲気を持っている」と彼女は感じ、街並みに「東京をあんなにも醜くしてしまっているぞっとするような煉瓦や鉄の建造物」が見られないことを嬉しく思った (158)。

一方で、西洋的であるにもかかわらず、イギリス人旅行者たちが問題視せず、むしろだからこそ喜んだものがある。それがホテルである。京都に外国人向けの宿泊施設が現れたのは明治時代であり、中村屋が 1868 (明治 1) 年に洋間 8 室を備えたのを筆頭に、1877 (明治 10) 年には自由亭、1881 (明治 14) 年には也阿弥ホテルといった外国人向けのホテルが開設された。その後も京都における洋風ホテル需要の高まりを背景に、1888 (明治 21) 年に京都ホテルの前身である常盤ホテル、1900 (明治 33) 年に都ホテルが開業した。1902 (明治 35) 年に書かれた「外人と京都」は、京都の 3 大ホテルとして也阿弥ホテルと都ホテルと京都ホテルの名を挙げ、これらの設備や宿泊者数や特徴を比較している。なかでも、也阿弥、也阿弥楼、円山ホテルなどの名でも呼ばれていた也阿弥ホテルは、イギリス人に、「ほとんどの外国人が京都滞在中に住処にしている」(Dresser 1882: 119) や「19 世紀末期に外国人観光客に人気があり、Rudyard Kipling も利用した」(East 1890: 29) と紹介され、彼らの京都観光の拠点として旅行記に幾度となく登場している。

イギリス人旅行者たちは、京都の西洋化を嫌悪した一方で、日本旅館ではなく、也阿弥ホテルをはじめとする西洋ホテルに挙って泊まった。20 世紀初頭に来日したと思われる水彩画家の Walter Tyndale (1910) の場合は珍しく、京都で「純粋に日本的な宿に泊まりたい」(61) と思っていた。しかし、「日本語を全く知らないので、純粋に日本的な宿に泊まるという危険を冒すにはまだ早い」(58) と考え、也阿弥ホテルに投宿した。そしてそこでは、「十分な英語が話され、私の欲している物事を伝えることができた」(58) と記している。この記述から、イギリス人旅行者たちが西洋ホテルに泊まった理由のひとつに、日本旅館では英語が通じなかったことがあると推測できる。

さらに重要な理由としては、設備が挙げられる。「外人と京都」は、也阿弥ホテルについて、「建物は和洋折衷」で、「客室の体裁は至極簡単で、京都ホテルの如く古美術品が少く、唯寝臺、^{テーブル} 箆、洗面臺、椅子、卓が置き列

べてであると云ふまでだ」(「也阿彌ホテル(上)」3)と言っている。この記事が描いているのは、1899(明治32)年の火災の2年後に再建された也阿彌ホテルの様子であるが、以前もこれと大きく違ってはいなかったようだ。日本の建築や美術をヨーロッパに紹介した工芸家 Christopher Dresser (1882) は、1876(明治9)年に也阿彌ホテルに宿泊し、「しばしばヨーロッパ式ホテルと呼ばれるが、実際はどこまでも日本的な建物である。ただし、テーブルに椅子、ベッドに洗面台が備わっている」(119)と述べている。彼の約1年後に也阿彌ホテルに泊まった Annie Brassey (1878) は、客室にとても満足したようで、「部屋は清潔で快適そうでしたし、ダイニング・ルームはいくつかの屏風と火鉢のほか、テーブルが1台と椅子が6脚ありました。ベッドルームには、ベッドと屏風と洗面台がありました。本当に、想像していた以上に贅沢です」(339)と語っている。建物自体は和風だったが、設備は洋風であり、客室には布団と茶卓と座布団ではなくベッドとテーブルとチェアがあった。

そして京都に見られるこれら西洋文化の影響を、イギリス人旅行者たちは全く批判したりはしない。それは、Emily Bates (1889) と Lewis Jessop (1895) の次の記述からもわかる通り、それらは彼らが快適に旅するのに必要不可欠だったからだ。特にベッドはそうだったようだ。オーストラリアや中国を旅したのちに日本にやってきた Bates は、京都旅行の際に奈良へもいった。そこで茶屋に泊まったのだが、「(部屋に) ベッドはなく、洗面設備もない、テーブルなし、チェアなし、姿見なし、何にもない！」と不満を漏らし、なかでも日本の布団について長々と文句を言っている(161-162)。布団で寝るといふ彼女にとっての酷い経験もあって、京都、そして也阿彌ホテルに戻ってきたときの気持ちを、「自分たちのホテルに帰ってきたということがはっきりとわかったとき、勝利感のような思いとともに、本当に我が家にいるような気がしました」(165)と綴っている。Jessop は自転車で日本を旅していたのだが、彼もまた京都では、「日本人によってヨーロッパのスタイルで営まれている日本のホテル」(82)と彼が呼ぶ也阿彌ホテルに泊まっている。そして、「私たちは京都での1日だけの滞在を満喫しようと誓った」と言っているが、それは「(今後しばらくは) ベッドで寝られることやまともな食事にあること」がなさそうだったからだ(82)。

5. 京都の自然美

也阿彌ホテルはイギリス人旅行者たちに好評だった。その理由は、自国でと同様の寝食を可能にさせてくれたからだけではない。それは、そこからの眺望がすばらし

かったからでもある。「外人と京都」は、也阿彌ホテルの比類ない特長として「位置が形勝を占めている」(「也阿彌ホテル(上)」3)ことを挙げている。続けて、「後には名にしおふ布團着たる東山をひ扣へ、眸を放てば全市さては嵐山愛宕峯の西山一帯、交も目睫の間に攢り、四邊は秋楓紅を吐き、春は祇園の万朶の夜櫻、燦爛として門前にあり。風通りも善ければ雪にも善し。四時景色には詠め倦かぬとは、蓋し過賞ではなかるう」(3)と説明している。

実際に、也阿彌ホテルに宿泊したイギリス人のほとんどが、その円山の高台からの眺めを褒め称え、それを描写している。そのひとりが、Arthur Hutchinson (1880) である。彼は、挿絵(図1)とともに、その絶景を次のように描いている。

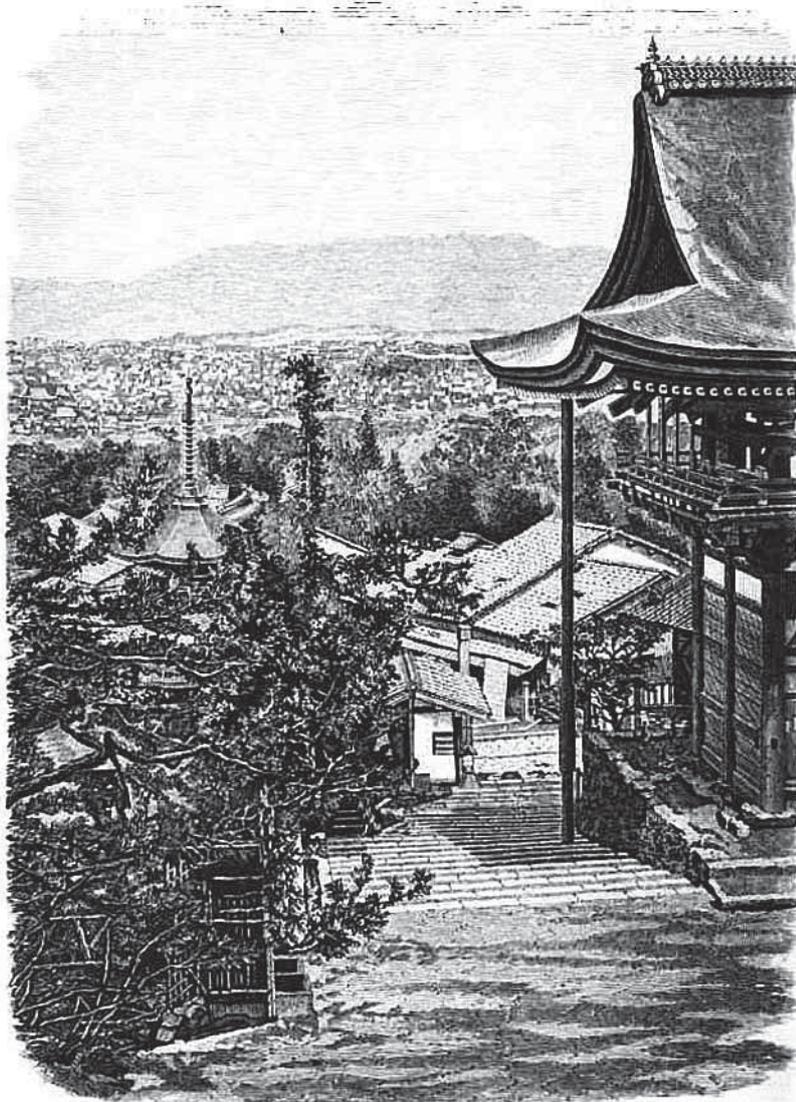
[...] Kyoto is indeed a "joyous city." At last we reach the foot of the hills on the south side of the valley, and after mounting several flights of stone steps, we gladly rest ourselves in the verandah of a semi-European hotel on the Maruyama, or round hill, from which we can command a panorama of the city. (See the picture)

In the clear evening atmosphere every building seems to stand out distinctly, even those at the foot of the opposite hills. The great curved roofs of the five thousand temples, the many-storied pagodas, with brightly gilt nine-ringed spires, the look-out stations where watch is kept against fire, the silvery streams of the Kamo river ever and anon disappearing amongst the dwellings of half a million of our fellow-creatures, the long white wall encircling the groves that hide the Imperial residence, where for seventeen centuries the Mikados dwelt securely, the deepening gloom upon the distant hills, and the fantastic roofs peeping out from the fir-trees in the immediate foreground below us, all make up a picture upon which memory loves to linger. ('A Visit to Japan III,' 28)

この風景の下地となり、その主要素となっているのが京都の自然美である。山紫水明は、明治時代に京都が外国人を魅了した最大の理由のひとつである。それゆえ、1910(明治43)年の'The City of Kyoto'と題されたThe Timesの京都紹介は、京都の特徴として、「古雅と宮廷の厳かさ」と「数え切れないほどの芸術的遺産」に加え、「偉大な自然美」を挙げている(58)。さらに、

「有名な琵琶湖と京都を隔てる山脈をはじめとする木々に覆われた山々に守られ」、「京都からはじまり大阪湾まで南方に広がる肥沃な平地にある」京都を、「これ以上にすばらしい場所に位置する都市を想像しがたい都市として紹介している（58）。

この京都の魅力を存分に味わわせてくれる場所であったがゆえに、也阿弥ホテルはイギリス人旅行者たちに気に入られたのだろう。あるいは、多くのイギリス人旅行者たちがそこからのすばらしい眺望を仔細に描写し賛美したがゆえに、絶景を織りなす自然美が、京都の魅力としてイギリス人に認識されていったのかもしれない。



（図1）‘KIOTO, THE SACRED CAPITAL OF JAPAN: View Taken from the Maruyama Hotel’（Hutchinson ‘A Visit to Japan III,’ 27）

6. 京都での食事

洋風ホテル以外にも、イギリス人旅行者たちが批判することなく、むしろ自ら求めた西洋的なものがある。そ

れが洋食である。「外人と京都」は「外人は京都へ来て甘いものを食ほうとは思って居らない」（「外人の動靜（中）」3）と述べているが、これは的を射ていたようだ。だから、イギリス人の旅行記に、京都での食事に関する描写があまりないのだろう。彼らは街の料理屋ではなく宿泊していたホテルで食事をとることが多かった。その食事の内容がフランス人作家 Pierre Loti の旅行記に書き残されている。也阿弥ホテルで彼がとった軽食は「完全にイギリス式で (entirely in the English style) 提供され、紅茶にパンにバターがついていた」（142）。ほかの食事も、「真に英国的なやり方で (after a manner truly Britannic) 用意され」ており、「小さなパンと生焼けのロースト肉 (underdone roast meats) と茹でたジャガイモ」が出されたそう（148）。このような食事を出す也阿弥ホテルについて Loti は、「何かを食べるにはそこへいかざるをえない。というのも日本料理は私達にとっては、せいぜい娯楽の一形態でしかないからだ」（141）と語っている。

Loti の記述からも、外国人旅行者たちが京料理、あるいは日本料理よりも洋食を好んだことがわかる。フランス人といえばイギリス料理を貶すのが常だが、Loti にはそのイギリス料理よりも日本料理のほうが舌に合わなかったようだ。和食の評価は、イギリス人旅行者たちの間でも芳しくなく、その不味さを伝えようとしている旅行記もある。例えば、Leonard Smith (1900) は京都の茶屋での夕食の内容を記したうえで、「これらの品々は魅力的でなさそうには聞こえないかもしれないが、実際はとんでもなく酷かった」（125）と、読者に感想を述べている。お酒についても、「酒は温かい状態で出され、その味はとつてもまずいシェリー酒と水を混ぜたような味だった」（126）と言っている。最後には、「日本の正餐は経験としては一度はよいだろうが、それ以上は自殺行為だろう」（128）と述べている。Liberty 夫妻とともに、日本人から茶屋での昼食に招待された Charles Holme も、そのときの様子を面白おかしく描きながら、日本料理を酷評している。彼は生魚を「それについて考

えないようにしながら」、咀嚼して飲みこんだ（8）。汁物に関しては、「異様な牧草のような味がして、ひどい吐き気がした」らしい（8）。それゆえ、「残りは『パス』

をして、パンを頼み、「パンの大きなかけらを噛んで、ビールをたくさん飲むことで、食べたものを何とか吐かないようにした」(8)。また、彼曰く、「マッシュルームとかそういう類のキノコではなく、想像しうる限りの毒キノコの味がする正真正銘の毒キノコ」(8)も入っていたらしい。このような食事に対して、同伴していた Liberty 夫人はすぐに「戦闘能力を失い (*hors de combat*)」(8)、食後に彼らは、「主人にすばらしい宴を催してくれたことへの感謝を述べたが、心のなかでは似たような招待にはこれからは一切応じないと決意した」(8)。

外国人の日本料理に対するこのような評価を知っていたからか、日本人のほうも、京料理や日本料理で彼らを喜ばせようとはあまり思っていなかったようだ。Walter Tyndale (1910) は京都の知人に日本料理を食べにいきたいかと尋ねられたとき、「その土地の食事がどの程度自分に合うのかを確かめたかった」ので喜んだが、その日本人の知人は「それをあまり勧めなかった」(61-62)。というのも、彼が以前にポルトガル人と日本料理を食べたとき、そのポルトガル人が後日体調不良になったからだ(62)。また、記者として来日した画家でもある Charles Wirgman (1874) は、祇園の中村屋での晩餐会の様子を *The Illustrated London News* の ‘A Japanese Dinner Party’ という記事にしているが、食事は「ロシヤ風」で新じゃがいもの添えられた子豚の丸焼きやキジがあり、飲み物にはクラレット、パール・エール、シャ

ンパン、食後にはスイーツとコーヒーやリキュールが出されている(13)。この晩餐会を催した日本人には、彼を日本食でもてなそうという気は毛頭なかったようだ。

イギリス人旅行者たちは京都で洋食を食べて和食を酷評しているが、その一方で、彼らの多くは一度は京都で「日本の晩餐 (a Japanese dinner)」を体験し、それを楽しみにしていたイギリス人も少なくはない。Smith の場合は、也阿弥ホテルで再会した知人に同行させてもらってまで、それを体験した。ただし、彼らが「日本の晩餐」と呼び楽しみにしていたのは、Wirgman の ‘A Japanese Dinner Party’ につけられた絵(図2)からも推察できるように、京料理や日本料理でなく、芸妓だった。「外人と京都」の「當地へ来遊する外人が假りに四千人として、其四分の一は慥に藝妓サンなるものを観て行く」と考へて差支なからう(「外人遊興の模様(上)」3)という言葉は、誇張しすぎだとは言えない。実際に、多くの外国人がそのために都をどりを観にいっている。そして、京都での日本の晩餐も同様の目的からだ。このことを Smith は、「正餐なしに(芸者の)踊りを見ることはほとんど不可能で、それは踊りがその重要な一部だと考えられているからだ」(125)と読者に説明している。彼らが求めたものは、芸妓、そして彼女たちの衣裳や踊りが感じさせる異国情緒だった。



(図2) ‘A Japanese Dinner Party’ (Wirgman 12)

まとめ

明治時代に京都の市井の人々は、外国人旅行者たちに対して、後をつけたり凝視したりという非礼や不愉快だと思われてもしかたのない行動をとっていた。それにもかかわらず、イギリス人が彼らに抱いた印象は、「外人と京都」が危惧していたものとは対極的だった。彼らの旅行記では、京都人は非難され嘲笑されるどころか、好意的に描かれ、往々にして賛美された。そしてこのような京都人像は、イギリス人旅行者たちの京都観と大いに関係があると考えられた。彼らは、京都が西洋の影響外にあった異国としての日本を体現していることを期待し、実際にそうだと感じた。このことが、彼らのそこの住人への好意的なまなざしを形成し、彼らに京都人を理想化させたのだ。また、京都が昔ながらの日本であることを望んでいたがゆえに、イギリス人旅行者たちはそこに西洋の影響が見られることを忌み嫌った。それなのに、自分たちの宿泊施設と食事が西洋的であることを西洋文化の流入として捉えて批判することはなかった。むしろそれらを喜び、そのような自らの態度を矛盾だと考えたり問題視したりすることはなかった。これは、第一に、それらが彼らの旅の快適さのためには不可欠だったからだ。考える別の理由は、实际的でなく思想的なものである。彼らが京都に求めていたのは異国としての昔ながらの日本だった。そして、異国を感じるには、その地の生活に溶け込んで内側からそれを眺めるのではなく、異質な生活様式や考え方を持つ文字通り「外人」のままであれば十分であり、むしろその視点が必要となる。だから、彼らは自分たちの生活様式を日本式にする必要性を感じず、また、自分たちの宿や食事が洋風であることには無頓着だったのだ。これらのことから、イギリス人旅行者たちが明治時代に京都に求めていたコト・モノとは、何よりも、昔ながらの日本、別言すれば、西洋から隔離されてきた異国としての日本であり、異国情緒だったと言える。

注

1. 本論文は、平成 25 年度科学研究費基盤研究 (C) 「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」(課題番号 25511007 研究代表者: 野口祐子) の成果の一部である。また、本論文の第 2 節と第 4 節の一部は、『コルヌコピア』第 25 号 (2015, 京都府立大学英文学会発行) 掲載の拙論「明治時代のイギリス人旅行者たちが描いた『昔ながらの日本』と『神社仏閣の都市』としての京都—敬虔なキリスト教徒の目に映った『宗教都市』京都の姿—」の一部 (22-24) と重複している。
2. 全 38 回の「外人と京都」の掲載日、掲載頁、副題は以下の通りである。

- 10 月 7 日 (3 頁) 「総説」
- 10 月 8 日 (3 頁) 「外国人案内人取締規則」
- 10 月 9 日 (3 頁) 「外人の發着」
- 10 月 10 日 (3 頁) 「外人の動靜 (上)」
- 10 月 11 日 (3 頁) 「外人の動靜 (中)」
- 10 月 12 日 (3 頁) 「外人の動靜 (下)」
- 10 月 13 日 (2 頁) 「旅館管理者の苦心談 (上)」
- 10 月 14 日 (3 頁) 「旅館管理者の苦心談 (下)」
- 10 月 15 日 (3 頁) 「京都ホテル (上)」
- 10 月 16 日 (3 頁) 「京都ホテル (下)」
- 10 月 17 日 (3 頁) 「也阿彌ホテル (上)」
- 10 月 20 日 (2 頁) 「也阿彌ホテル (下)」
- 10 月 22 日 (3 頁) 「都ホテル (上)」
- 10 月 24 日 (3 頁) 「都ホテル (下)」
- 10 月 26 日 (3 頁) 「オリエンタルホテル (上)」
- 10 月 27 日 (2 頁) 「オリエンタルホテル (下)」
- 10 月 28 日 (3 頁) 「外国人案内人 (ガイド)」
- 10 月 29 日 (3 頁) 「開誘社と東洋通辯協會」
- 10 月 31 日 (3 頁) 「矢島健次氏の懷奮談」
- 11 月 1 日 (3 頁) 副題は確認できず
- 11 月 2 日 (3 頁) 「ナンバー、ナイン」
- 11 月 5 日 (3 頁) 「外人遊興の模様 (上)」
- 11 月 6 日 (3 頁) 「外人遊興の模様 (下)」
- 11 月 7 日 (3 頁) 「車夫の悪弊 (上)」
- 11 月 9 日 (3 頁) 「車夫の悪弊 (中)」
- 11 月 10 日 (2 頁) 「車夫の悪弊 (下)」
- 11 月 12 日 (3 頁) 「金融機関の不備 (上)」
- 11 月 13 日 (3 頁) 「金融機関の不備 (下)」
- 11 月 15 日 (3 頁) 「注意すべきもの二三」
- 11 月 16 日 (3 頁) 「貿易業者の三大弊」
- 11 月 17 日 (5 頁) 「西村総左衛門商店」
- 11 月 18 日 (3 頁) 「池田合名會社」
- 11 月 19 日 (3 頁) 「辨天合資會社」
- 11 月 20 日 (3 頁) 「錦光山宗兵衛商店」
- 11 月 22 日 (3 頁) 「貿易商店の二笑柄」
- 11 月 23 日 (3 頁) 「並河靖之商店」
- 11 月 27 日 (3 頁) 「たかしまや」
- 11 月 28 日 (3 頁) 「結論」

引用文献

- An Anglo-Indian Globe-Trotter. [C. R. Sail]. *Farthest East, South and West: Notes of a Journey Home through Japan, Australasia and America*. London: W. H. Allen & Co, 1892. Print.
- Bates, E. Katharine. [Emily Katharine Bates]. *Kaleidoscope: Shifting Scenes from East to West*. London: Ward & Downey, 1889. Web. 29. Nov.

- 2015.
- Bond, Catherine. *Goldfields and Chrysanthemums: Notes of Travel in Australia and Japan*. London: Simpkin, Marshall & Co., 1898. Print.
- Brassey, Mrs. [Annie Brassey]. *A Voyage in the 'Sunbeam': Our Home on the Ocean for Eleven Months*. London: Longmans, Green, & Co., 1878. Web. 29. Nov. 2015.
- チェックランド, オリーブ. 『明治日本とイギリス—出会い・技術移転・ネットワークの形成—』. 杉山忠平・玉置紀夫訳. 1989. 法政大学出版局, 1996. Print.
- 'The City of Kyoto.' *The Times* 19 Jul. 1910: 58. Print.
- Davidson, Augusta M. Campbell. *Present-Day Japan*. London: T. Fisher Unwin, 1904. Web. 29. Nov. 2015.
- Dixon, William Gray. *The Land of the Morning: An Account of Japan and Its People, Based on a Four Years' Residence in That Country Including Travels into the Remotest Parts of the Interior*. Edinburgh: James Gemmell, 1882. Web. 29. Nov. 2015.
- Dresser, Christopher. *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures*. London: Longmans, Green, & Co., 1882. Web. 29. Nov. 2015.
- East, Sir Alfred. *A British Artist in Meiji Japan*. Ed. Sir Hugh Cortazzi. 1890. Brighton: In Print, 1991. Print.
- 長谷川雅世. 「明治時代のイギリス人旅行者たちが描いた「昔ながらの日本」と「神社仏閣の都市」としての京都—敬虔なキリスト教徒の目に映った「宗教都市」京都の姿—」. 『コルヌコピア』第25号 (2015): 21-42. Print.
- Holme, Charles. 'The Diary of Charles Holme's 1889 Visit to Japan and North America.' *The Diary of Charles Holme's 1889 Visit to Japan and North America with Mrs Lasenby Liberty's Japan: A Pictorial Record*. Ed. Toni Huberman, Sonia Ashmore & Yasuko Suga. Folkestone: Global Oriental LTD, 2008. 1-105. Print.
- 堀博・小出石史郎訳. 『神戸外国人居留地—ジャパ・ン・クロニクル紙ジュビリーナンバー—』. ジャパ・ン・クロニクル編. 神戸新聞出版センター, 1980. Print.
- Hutchinson, A. B. [Arthur B. Hutchison]. 'A Visit to Japan III.' *The Church Missionary Gleaner* 1 Mar. 1880: 27-28. Print.
- . 'A Visit to Japan IV.' *The Church Missionary Gleaner* 1 Apr. 1880: 37-40. Print.
- . 'A Visit to Japan V.' *The Church Missionary Gleaner* 1 May. 1880: 53-55. Print.
- Jerningham, Sir Hubert. *From West to East: Notes by the Way*. New York: E. P. Dutton & Company, 1907. Web. 29. Nov. 2015.
- Jessop, Lewis J. 'Round Japan on a Bicycle.' *Cycling* 15 Aug. 1895: 82-83. Print.
- Knollys, Henry. *Sketches of Life in Japan*. London: Chapman & Hall, 1887. Web. 29. Nov. 2015.
- Lambert, C. & S. [Charles Joseph & Susan Lambert]. *The Voyage of the "Wanderer" from the Journals and Letters of C. and S. Lambert Edited by Gerald Young: Illustrated by R. T. Pritchett, and Others*. London: Macmillan and Co., 1883. Web. 29. Nov. 2015.
- Lawson, Lady. [Kate Lawson]. *Highways and Homes of Japan*. London: T. Fisher Unwin, 1910. Web. 29. Nov. 2015.
- Leyland, R. W. [Ralph W. Leyland]. *Round the World in 124 Days*. Liverpool: Gilbert G. Walmsley, 1880. Web. 29. Nov. 2015.
- Loti, Pierre. 'Kioto.' *Japan as Seen and Described by Famous Writers*. Ed. and trans. Esther Singleton. New York: Dodd, Mead and Company, 1905. 141-148. Web. 29. Nov. 2015.
- 丸山宏. 「近代ツーリズムの黎明—「内地旅行」をめぐる—」. 『十九世紀日本の情報と社会変動』. 吉田光邦編. 京都大学人文科学研究所, 1986. 89-112. Print.
- Sladen, Douglas. *Queer Things about Japan*. London: Anthony Treherne & Co., 1904. Web. 29. Nov. 2015.
- Smith, Leonard Eaton. *West and By East*. New York: The Knickerbocker Press, 1900. Web. 29. Nov. 2015.
- Tyndale, Walter. *Japan & the Japanese*. New York: Macmillan, 1910. Web. 29. Nov. 2015.
- Vincent, Lady (Howard). [Ethel Vincent]. *Newfoundland to Cochin China by the Golden Wave, New Nippon, and the Forbidden City*. London: Sampson Low, Marston & Company, 1892. Web. 29. Nov. 2015.
- Wilkinson, Hugh. *Sunny Lands and Seas: A Voyage in the SS. 'Ceylon,' Notes Made During a Five Months' Tour*. London: John Murray, 1883. Web. 29. Nov. 2015.

Wilson-Carmichael, Amy. [Amy Beatrice Carmichael].
From Sunrise Land: Letters from Japan.
 London: Marshal Brothers, 1895. Web. 29. Nov.
 2015.

Wirgman, Charles. 'A Japanese Dinner Party.' *The Illustrated London News* 3 Jan. 1874: 12-13.
 Print.

Y, S. 「外人と京都（一）—総説—」. 『京都日出新聞』
 1902（明治35）年10月7日: 3. Print.

——. 「外人と京都（五）—「外人の動静（中）」—」. 『京
 都日出新聞』1902（明治35）年10月11日: 3. Print.

——. 「外人と京都（八）—京都ホテル（上）—」. 『京
 都日出新聞』1902（明治35）年10月15日: 3. Print.

——. 「外人と京都（九）—京都ホテル（下）—」. 『京
 都日出新聞』1902（明治35）年10月16日: 3. Print.

——. 「外人と京都（十）—也阿彌ホテル（上）—」. 『京
 都日出新聞』1902（明治35）年10月17日: 3. Print.

——. 「外人と京都（十一）—也阿彌ホテル（下）—」.
 『京都日出新聞』1902（明治35）年10月20日: 2.
 Print.

——. 「外人と京都（十二）—都ホテル（上）—」. 『京
 都日出新聞』1902（明治35）年10月22日: 3. Print.

——. 「外人と京都（十三）—都ホテル（下）—」. 『京
 都日出新聞』1902（明治35）年10月24日: 3. Print.

——. 「外人と京都（二十）—外人遊興の模様（上）—」.
 『京都日出新聞』1902（明治35）年11月5日: 3.
 Print.